67
375

始

67-375

北西遊記

人と山と水の訪問記

長尾藻城稿

昔者、橘南谿翁周ねく海内を漫遊し、東西遊記の著あり。今猶人口に膾炙する所なり。夫れと是とは異なれど予近頃チトばかりの所用あり。春晩夏初の好季節を幸ひ、飯より好きな旅行を思立ち、先づ脚を越後新潟に著け、加州金澤を經て京都に出で、大阪より岡山を過ぎ鐵路西に走りて關門海峽を渡り九州路に入り、熊本まで直行し蹕を廻して福岡に歸り、更に豐州線により別府に至り、海路四國に渡り、更に山陽東海を經て歸東せり。旅行日數十有八日間、軋る所の鐵路渡る所の海波通計實に太千餘哩。素より至便なる交通機關を利用してのこと、敢て珍とするに足らねど、予に取りては近來可なり大なる旅行にてありき。而も歴訪する所の人士は悉く是れ當代杏林界の巨擘にして、過ぐる所の山水は悉く是れ天下の名山大川なり。斯道の先輩と膝を交へて高論卓説を傾聽し、海内の名勝舊蹟に歴史上の遺趾を尋討す。其愉快云ふ可からず。本編は旅中筆に任せて書綴りし旅日記の一節なり。行李匆々文飾を施すに遑あらず、茲に暫らく有體の儘を載録するこゝなしぬ。若夫れ、多少の實益と趣味を讀者諸彦に頒つことを得ば幸は望外の幸なり。尚ほ沿道過ぐる所の辱知先輩各位の眞心籠められたる厚遇と、何角便宜を與へられたる芳意に對しては深く鳴謝する所なり。記するに臨み歴訪諸彦の音容恍として眼に在り、山神水靈亦た腦裏に來往し、恰も我と相話するものゝ如し。

藻城再識

時は大正七年五月三十一日（金曜日晴）午後四時半、横濱の蝸廬

太 8.7 交内

を出で櫻木町驛に電車し東京驛に向ひ、著後仂車を僦ひて上野驛に達す。之より先き藤根不忘居士と約有り、東京著後電話を以て上野出發の時間を報ずるを以てす。余赤帽に賃して其事を便ぜしむ。然るに赤帽先生如何なる間違にや余の既に出發せしを報ぜず。此事再電により分明せり、故に折角余を見送らんとせし雄文社及び二三の知友諸君は少からぬ失望せることを藤根氏の言により了得せり、厚意を無にせしこと愚痴を零せしも今更後の祭なり。藤根氏は旅中に頼まぬことよと愚痴を零せしも今更後の祭なり。藤根氏は旅中の注意なき宛ら嚙むで呑める如く教示せられ、何時も變らぬ厚意深情溢るゝが如し。『車中定めて暑からん扇子を持參せしや』と云ふに余は『忘れたり』と答ふれば言下に所持の扇子を出して『持ち行けよ』と授けらる。ことは些末の樣なれど、余を思ふ眞心の骨肉も及ばぬ親切振り、扨ては父母の再來かと涙の滴るゝ程嬉しかりき。聽て發車に幾程もあらじと赤帽に促さるゝ儘、僅かばかりの手荷物と諸共に身は刻車内の人となれり。藤根氏も暫しは車中に入り來りて二三の談話を交換せしが、發車の振鈴に下車、汽窗と『プラットホーム』、汽車は徐に進行を初む。見返り見送る顏と顏、實にや親しき友垣の間柄は、男女の訣れにも彌增して名殘惜しくも亦ゆかし。

新潟行の急行列車は午後八時發、汽笛一聲殘煙を輪にして闇黑を破て行く、轟轟の音漸く高くして進行も漸く速なり。同乘の一紳士說明して曰く、『此室は一等室を二等室に繰下けしものにて比較的美麗なり』と、それかあらぬか乘り心地よし。『汽車の待遇は尻に在り』抔打興じつゝ微睡夢覺むれば身は早や輕井澤に輪られたり。思へば去年八月藤根氏と共に此地に遊び途中雷雨に遇ひし事など思ひ浮べ、今しがた余を見送り呉れし其人の厚情を追想し、一種の情念に咽びぬ。長野を經、高田に至りて天全く明く。汽窗に

冕りて四方の山々を眺むれば流石は雪の國、處々に殘雪を留むるも亦以て眼界を新にするに足る、偶〻四五の農夫、妙齡の子女を督して早く出でゝ野に耕すあり、盧桑に憧るゝ都門の子女之を如何か觀る。五絕一首を口占し所見を描す。

曉起望殘雪、汽窗眼界新。寒村荒野裏。早見執鋤人。

汽車直江津より右折し新潟支線に入る。柏崎に至るの間沿岸危岩怪石に富み、碧波來て渚を洗ふ、海は名に負ふ日本海、佐渡ヶ島雲煙糢糊の間に隱見す。風景の明媚畫も亦及ばず。好風景に呑まれて一句一章だも得る所なし。されど柏崎は我同郷の豪傑日柳燕石翁が明治維新の際に仁輪寺宮を奉じ史官の身を以て北越の地に從軍し、絕大の雄志を齎らし、不幸熱性病に罹りて陣歿せし處、余今此地を過ぎて多少の感慨なからざるを得んや。燕石翁は勤王不二の士にして高杉晋作、小松帶刀寺と同格の人、當時刎頸の交あり、今の山縣含雪公の如きは遙に其後輩なり、嘗て坂本龍馬の命を受け燕石の下に使者の役に服せしものは實に當年の山縣狂助なりしことを知る人恐らく稀ならん。余嘗て此事歷を敍して『日本及日本人』雜誌に揭載するや、柏崎の人某燕石翁の碑を建立せしと聽て碑文を謄寫して余の許に寄贈ちれしことあり（文は載て日本及日本人明治四十一年中に在り）彼を思ひ此を思ひ柏崎に下車し、石碑に一拜せんと思ひしかど、前程を急ぐの爲め其意を得ざりしは遺憶なりき。遙に車上より默禮して過ぐ。嗚呼、維新の偉業幾多無名の英雄の力に頼りて成るもの多し。豈に生殘せし所謂少數元老の功を專らにするを許さんや。而も人に幸あり不幸あり、燕石翁の英魂今何處にかある、俯仰感慨措く態はず、覺えず雙眸一滴の涙あり。

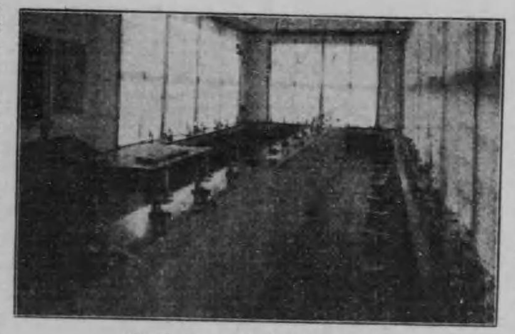
過越後柏崎懐日柳柳東翁（柳東者燕石之別名也）

我過柏崎弔英雄。暗涙濕々恨不窮。廊廟今無憂國士。滿山殘雪想燕翁

餘感を殘す暇もなく汽車は遠慮なく軋り〳〵て北東に向て進行す。畏友法學士山崎佐君嘗て越後路に入り鰺浪温泉に遊び、其地よりして繪葉書を寄せ、余に一遊を促せしことあり、余當時遊意勃然、今幸にして此地に入る、さしたる迂路にあらずんば宿痾たる温泉癖を醫せんと思ひ、同乘者に行程の如何を問ひしに、汽車の通ずるあるも支線に屬し、遊覽には優に一日程を要すと聞き斷念せしは遺憾なり。

六月一日（土曜日）

午前九時過ぎ新潟に著す。旅館菊池屋に投ず。一浴後車を僦して新潟醫專校に池田廉一郎博士を訪ふ。刺を通ずれば直に面接せられ、一別以來の寒暄を敍し終り、外來クリニックの終るまで校長室に待合せり。暫くして氏は用務を果して再び面會さる。余は手短に來意を告げ且つ高橋明博士にも紹介の勞を依賴せしに氏は快諾せられたり。午下卓を圍むで晝餐の饗を受け、高橋博士とも會見、來訪の用件を濟ませ、折角の來校ゆゑ校内の參觀を請へり、佐藤教務係の案内にて校内を隈なく參觀得る所少なからず。就中病理學の川村麟也博士の如き最近學位を得らるゝ筈なる衞生、細菌學の宮路重嗣教授の



新潟醫專病理學實習室

如き最も懇切に諸般の說明を與へられたり、川村博士が病理組織實習室に於て學習者の便を圖り階段の配置と光線の利用に深き注意を拂はれたるの設備は特に目新らしく感得せり。次で外科手術室及婦人科手術室等を觀る。余は敢てお世辭を云ふにあらねど新潟醫專の手術室は余の他に於て觀たる範圍に於て實に優秀にして理想的のものと評するを憚らざるなり。蓋し同校は開設日尙ほ淺く他校と相拮抗して遜色なからしむるを期せんが爲め、教授諸君が進取努力緊張の氣分滿々たるの然らしむる所ならんも、觀て斯ほど心地よく氣持よきはなし。偶〻校長に向て卒業生を出す數は如何と問へば『既に第四回に及べり年々年始狀が殖ゆるばかりです』と、微笑を漏らし乍ら物語られたり此簡單なる言葉中如何に燃ゆるが如き誇と喜を語るものあるか。其心事を看取するに難からず。醫育教育に從事せんものは宜しく此樂みを以て樂となし、思を此點に集中せざる可からず。池田校長の片言隻句賴もしくも亦嬉れし。

余の新潟醫專を過ぎて感じたることは教授諸君の悉く少壯有爲生氣潑剌たるに在り。此校に於て亦た停年制を設くるの必要なからん乎、呵々。此校の特色とする所は頗る多きも理學士にして醫學士を兼ぬる精神病科の中村隆治君等珍とするに足る。余が精神病科を訪へる時中村君は慈々として何か標本の手入れをなし居られたり、仙骨稜々人間離れのしたる風姿愛す可し、精神病室は舊縣立醫學校の建物を其儘利用されたるものにして、設備の上に於て特記す可き點を見さるも、導かるゝまゝ各病室を參觀せり。中村君は將に外出せられんとする模樣あるを以て匆々にして辭し去らんとせしに、『何、急きはせじ信濃川の「ボートレース」に行くなり、今に友人の誘ひに來るならん』と答へらる。余は旅館までの路順ならば

イザヤ御同行せんと云ひ、相伴ふて校門を出づ。何たる無邪氣ぞや、聞けば今日は法科と醫科の來賓競爭ありとかや、法科とは新潟在勤の法科大學出身の縣行政官及裁判所連を指すなり。入つては醫專に敎鞭を執るの人、偶〻土曜日の公暇出ては一竿の舵手端舟輸贏を爭ふ人と化す。學生時代の昔を忘れざる所、花もあり實もありけり。世の公職を曠うしてだも東奔西走唯だ是れ內職に汲汲たるの徒と相對比して是非夫れ將た孰れぞ。余は旅館の前にて惜しき袂を分ち中村君と別を告げたり。之より先き池田博士恐縮にも余の爲めに晩餐會を催されんとするの約あり、午後六時來訪せられ、交話十數分の後雙々車を聯ねて旅館を出で、新潟有名の旗亭鍋茶屋へと案內されぬ。到れば院長澤田敬義博士、外科の高橋博士等既に座に在り。余等を待ち詫びらるゝものゝ如し、余は澤田院長とは初對面なり、池田氏を通じて一應の挨拶を了し、鄭重て設けの席へと招ぜられたり。酒間斡旋の勞を取るものは一粒選りの新潟美人四五名なり、其名前も分り居れど天機は玆に漏らさざるを以て妙とせん。女將亦來て興を幇く。校長院長の勢力範圍の大なる今更の感あり。佳肴珍味は處狹まで運ばれたるも余は深く酒を嗜まず、且食物に好惡頗る多く、徒らに膳上の紋理たらしめしは不本意なりし。されど斯かる宴席は大好なり、興に乘じて怪氣焰を吐くに於て必ずしも人後に落ちず、而も多辯饒舌の惡癖あり時ありて發作す。今夜も愉快てふ刺戟により此發作は遺憾なく發揮し、折角の新潟美人をして嬌喉と絃聲を試むるの餘地なからしめしは、さりとは野暮の骨頂なりしと後にて思合せたり。五絕句以て實況を描寫す。（聯珠體に倣ふ）

何幸野人侍盛筵。三杯美酒醉陶然。千秋恨事半宵裏。唯見美人不聽絃。
唯見美人不聽絃。談論風發酒杯前。微吟淺酌時呼白。彩管一枝寫畫箋。
粉脂香和墨痕妍。風流極致人知否。惱殺當年老杜川。
惱殺當年老杜川。白頭休笑伍青年。紅裙呈媚侍左右。猶似兒孫戲膝前。
猶似兒孫戲膝前。身如居家意安然。此樓呼做鍋茶屋。何幸野人侍盛筵。

一座歡聲涌くが如し、鍋茶屋の名夫れ名詮自稱か、此樓北越第一の樓、杉村楚人冠等の屢〻遊ぶ所、校書亦能く其姓字を記す。頃者石黑男爵も亦た來る。情歌一首を殘して去る。妙年の妓中之を嬌舌に上せて口吟するものあり、文句を忘れたるは遺憾なり。興趣未だ罄きざるも、余は愛を割て辭し去らんとす。去るに臨み池田、澤田、高橋の各博士幾多の紅裙軍と見送りて玄關先に在り予等草莽の一野人何が爲めに此厚遇を受くるやと云ふに、余の此行實は日本外科全書の編纂川を以て監修者佐藤三吉先生の使命を帶びて來れるもの、蓋し先生餘光の及ぶ所にして深く感銘すると同時に該地諸先輩の厚意を感謝して措かず。旅館に歸りしは午後十一時に近し。

翌六月二日（日曜日）前夜の返禮の爲め池田博士を歷訪せずば禮を失するを知るも、昨夜盧禮省略の默約あるを以て缺禮を敢てし午前六時三十分發の汽車にて加州金澤に向ふ。此地より直江津までは前日の熟路又記す可きのことなし。直江津より金澤に至るの間鐵路大概ね海岸線に沿ひ、海波萬里、怒濤時有て岩石を嚙む、有名の親不知、子不知の險等汽窓の間より指顧するを得可し、風景の明媚えも云はれず途上口占の惡詩二三。

鐵路枕岸曲々馳。穿山越水見將危。古人不識文明賜。夢裏行過親不知。

波壁風牆鎖海門。蟹軒蟹屋幾村々。夕陽如水平沙晚。漁網曝邊人語喧。

行程十一時間餘午後五時過ぎ金澤に著す。下平博士出迎へられて「プラットホーム」に在り。雙々車を列ねて錦紫臺畔の下平邸に入る。令夫人等余を待つや久矣、慇懃迎へて善を盡し美を盡したる西洋間の客室に招ぜられぬ。厚遇優待到らざるなく、平生蝸廬の主人公たる一野人は恍として西洋の大「ホテル」に入りにし感あり。此居室は特に余の宿泊に充つべく豫め準備し置かれしものなること諸般の施設に於て推せられぬ。一浴後衣を更へ据り心地よき安樂椅子に凭り卓を圍みて晩餐の饗を受く。余が食物に好惡の辭多きこと〻て令夫人の配慮は又格別にて實に恐縮の外なく、果ては鶯を飼はんばかりの手厚き待遇を受けぬ。厄介なる年老ひたる旅鶯の飛び込みしもの哉。晩餐後主人公自ら東道の勞を取られ吟筇を日本三大公園の一たる有名なる兼六公園に引く。

是より先き下平博士夫妻余の爲めに語りて曰『時既に黄昏に近し、而も疲勞甚しからん、若かず公園行は明朝に於てする可ならん』と。余の曰く『日脚尚ほ高し、天下の名園を咫尺の間にし行ひて之に見えざるは山水の靈に負辜するに似たり、請ふ枉げて積年の宿望を果さしめよ』と庸哉先生（下平博士の雅號なり）素と余の山水癖を知る。卽ち直に東道の勞を取らるゝことゝなれり。令夫人二基の吟杖を携へて玄關口に立てり。相伴ふて下平邸を出づ。此處よりして兼六公園に到る僅に數百武のみ。路坦にして砥の如し。數分時にして早く既に園の外廓に入る。積翠深樹を蔭めて暮色蒼然。人影漸く疎にして頗る觀賞に適す。驟人由來ツムジ曲りの癖あり、晴好と云ひ雨奇と呼び、兎角景の變を喜ぶ。夕陽の名園又一入の眺めあり。

兼六公園とは白河樂翁公が曾て此園に遊び宏大・幽邃・人力・蒼古・眺望・水泉の六勝を兼備せりと云はれしに由來せりと云ふ。此園四時の景勝に富むを以て一名四時總宜園の名あり。園の起源を審にせざるも天正以前に蓮華池なるものあり、又た前田氏の封を此地に受くるに及び詩歌管絃の宴を開きしことありと云へば、泉石の排置は餘程以前よりのものならん。慶長年間前田利長明儒王伯子を招聘し此處に居らしめ、降て寛政の頃治脩公の治世明倫堂なる學校を園内に建てしことあり。今猶ほ圖書館の設あり、加州侯が學事を緩にせざる因由ありと謂ふ可し。下平博士の懸篤なる案内により園内を隈なく見物せり。瓢池の畔老樹陰森、那智の瀑布を摸せし松蔭瀧の邊風致特によし、小堀遠州好みの夕顔亭、後藤程乘が高人醉臥の狀を彫みしと云ふ郡鄂手水鉢の如きは數寄者の見遺す可からざるものか、其他彼處斯處の名ある名勝逐一擧ぐるに遑あらじ。余素と山水の癖あり各地を歷遊するに到る處其特色のあるあり、瞥見評を以て容易に其軒輊を論じ難きも、其名廣く現はれずして其實之に勝るあり、其名高くして其實之に伴はざるものなり。況んや鄕土自慢は人情の然らしむる所、偏言必ずしも聞く可からざるも、余加州に入て一度び兼六園を見、無遠慮に云へば其平常聞き及びし程にあらざりしに甚しく失望せり。何時の頃より何人の選に係るか此園を以て日本第一の名園なりとなすは愚れり。天然の地勢と景勝を捕へ來て最も自然的に人工の妙技を加へしものを擧ぐれば讃岐の栗林公園は遙に兼六公園の首位に在り。地海南の僻隅に在るを以て其名多く現はれざるも園藝眼を有する觀光客の備さに比較研究を費す價値あらん。余曾て讃岐風景論を著し盛に栗林公園の景勝を天下に呼號せしことあり。内に園藝家小澤圭次郎氏の說を引用せしものあり。今其一節を左に轉載せん。

栗林公園は遙に岡山後樂園の右に出でたり。西京桂離宮の園池は小堀

遠州侯の傑作と稱して榮行繁囘したる水局構造は巧ならざるにあらざるも猶ほ此の園池の下風に立たざるを得ず、熊本成趣園は池水清澄他に比類なしと雖も、池形に於て雜趣を免かれず、一覽すれば其の溪涯を看破し得可し。此の園の池沼潭委を諦認し難きものと同日に語る可からす、是れ其の水泉分脈の大勢に就て論ずる所なり。（中略）人の水戸の常盤公園金澤の兼六公園岡山の後樂公園を以て日本三公園となすは園事に曚昧なるものゝ月旦に過ぎず、金澤兼六園は天下の名園たるは論なきも、後樂園の景趣は遠く栗林園に及ばす佳園と云ふの寧ろ適評ならん。水戸の常盤公園に至りては天保の末年景山公の經營せし借樂園を改修せしに過ぎず、其の地勢たる仙波湖に俯瞰せし曠敞の岡陵なり、東京の飛鳥山に於けるが如く遊歩地のみ、運動場のみ、爭でか兼六後樂の二園と併稱するを得んや。畢竟日本三公園の題目は一笑をも値せざる俗評にして日本三景の稱呼に擬したる拙舉なり。水戸の老儒青山鐵揖は園藝家にあらざるも、五畿七道を漫遊し大八州遊記十三卷を著し遍く天下の山水を覽賞せり。内に記すらく。

予遊奥羽北越到處必觀公園池之美者。石川縣金澤爲第一。而與之相伯仲者特有栗林公園云々。

西村天囚の讃岐に遊ぶや、亦盛に栗林園を激賞し、果ては十二萬石の藩主の別業として驕奢に過ぎたりとまで言及せり。當時余は天囚に書を寄せて之を論難せしことあり。天囚此事を其著南國記中に記して曰く。

栗林公園の由來（南國記補）

十二萬石の別業としては驕奢の痕ありて關ヶ原の松の外に言ふべき者なしと言へりし栗林公園の由來は易んぞ知らん濟民の術に出でんとは、讃岐の長藻城書を寄せて之を駁して曰く、寛永十九年松平頼重の封を高松に受くるや、一年歳凶にして民饑う頼重乃ち土木を起して栗林莊を造り饑民をして勞を致して食を得せしむ尋常救濟の惰民を誘出せんことを恐れてなり、是れ豈饑饉救濟の奇籌に非ずや、而して所謂六大水局は「お泉水がゝり」と稱して灌漑に便にす民今に至りて其の澤を蒙れり亦是れ利用厚生の道を得たりと謂ふ可し、古の君主が或る理想の下に經營せし事業は未だ輕々に視察し易からず頼重は水戸威公の長子義公の實兄にして凡庸の主に非ざるをや云々、之ある哉英公の賢や政術の妙を游息の地に寓す、予の寡聞淺見なる尋常林泉の觀を爲しゝは竊に深く讃人に恥づ、而して此の事諸書記する所あらず、世人の知る者亦希ならんに予が武斷の見幸ひに藻城をして其の蘊を發し奇を吐かしめしは、亦以て栗林の山靈に謝するに足らんか。（天囚記）

以上は餘事に亙るが如きも、兼六園と栗林園との比較上事の序に筆し置く。我豈に愛鄉の私心に驅られ故らに偏頗の說を立つるものならんや。兼六園とて流石は加州侯の別弟の存せし所、天下の名園たるに於て敢て異議なきなり。

隈なく園内を遊遙し、下平博士と園藝論に餘念なし。博士亦曾て栗林園に遊び其勝を知る余の說に左袒せらるゝものゝ如し。園を出づれば既に薄暮、更に勇を鼓し金澤病院に至り夜中ながらも院内を參觀せり。流石に古き歷史を有する病院のことゝて萬般の施設整備せるを見る外科手術室は特に下平博士永年の經驗より何角工風を凝らせる優越の諸點と首肯さる可きもの多きは嬉し。猶明朝の再訪を期し、一先づ博士邸に引上ぐ、令夫人等酒肴を理し余等を待つや久矣。卓を圍むで團欒嬉々三盃の麥酒微醉陶然晚餐後黑甜鄉に遊ぶ。

六月三日（月曜日）午前五時眠全く覺む。忽にして玻璃窓外鐵騎鏘々の響を聞く、枕を欹て牀を離れ窓外を望めば、邸の背後に連

る宛がら眼も醒めんばかりの青草滋々たる練兵場に於て今や金澤聯隊の騎兵の一團來て朝調練を試むるなりけり。勇しなんぞ云ふばかりなし。嘹喨たる喇叭の聲と指揮官の號令の下に或は圓陣を作り、或は縱陣を作り、分れて四列となり、又合して一列となる。眞個に鞍上人なく鞍下馬なしの祕術を盡してさしもに廣き練兵場を所狹しと左方左方に馳驅疾走す、愉絕快絕蓋し一大壯觀なり。余往年咏ぜる騎兵の一律あり。茲に錄して懷を遣る。

紺衣赤袴服裝鮮。黃緒縫來肋間前。揮鎗長驅沙碎玉。舉鞭猛進蹄飛煙。馴練深學吶喊法。戰術常繙斥候編。以寡敵衆其任重。短兵猘破幾軍團(舊日本新聞做評林體)

朝來練兵場內を散步す。心身爲めに爽然、余下平博士を顧み戲れて曰く。『ア、練兵は余に取りては此上なき餘興にして秀逸なるものなれぞ』…『然も勇しき兵士が炎天沍寒の嫌なく汗に染み國家の干城として血稅を拂ふの心事に想到すれば我等國民は萬斛の同情を寄與せざる可からず、餘興抔とは思はざるの甚しきものなり』…『併し文弱の臣練武の氣象を養ひ得しとせば何かの爲めになるならん』…抔の談話を交換し、鑾て家に歸りて朝餉の膳に向ふ。餐後邸內に於て主人公、令夫人、令息(高等學校に在る)等と記念の撮影を爲す。時恰も園內凡百の草花今を盛りと咲き亂れいと美くし、藤の棚の下緣陰深き處を選みて背景とせり、時と場所と人を記念するに頗る妙なり、蓋し余の發議に係るものにして人物景色の配置等悉く余の意匠に出で余は技師長兼指揮係の役目を勤めしなり。こんな他愛なき事が余に取りては無上の樂にして又たこよなき道樂の一なり。偖ても余の道樂の犧牲となられし下平一家の家族の方々こそ嘸ぞ迷惑し給ひしならん。撮影後再び金澤病院に赴き、前夜見落したる場所を參觀し、兼て相見えんとの宿望なりし神經及精神病科の松原三郎博士を其教室に訪へり。博士は種々なる參考品を始め病室等を案內されいと親切に說明の勞を執られたり、余は綿密なる質問を試み得る所多し。金澤醫專の神經精神病科の頗る振ひ居るは感服の外なし。松原氏が一異彩を放てる學者として熱心の致す所ならん。醫專の精神病科は獨立して幾程もなく兎角內科の一分科として虐遇せられ、有れども無きが如き狀態に陷り易きに此校の斯くも發展し居らるゝは慶賀す可し、別けて病院經營の上から云ふも患者數は勿論收入の上に於て有數の位置を保てるは奇とすべし、教授上に就ても松原氏が苦心の蹟を徵す可きことを色々聞込みしかど、幷は他日別記に上すことゝせん。去て解剖學教室に金子次郎博士を訪ひ一見舊知の如く打解話に時を移し、病理學及法醫學の中村博士(八太郎氏)にも面會せり、今しがた屍體が來れりとて解剖の準備に忙はし氣なりしを以て匆々にして去る。解剖學や病理學や法醫學抔に從事せらるゝ人人は何處となく奧ゆかしき所あり、自分等が學生時代の昔を思ひ出しなつかしき樣な心地す。日々實地開業に從事し醫務に忙殺さるゝ醫家諸彥の時々母校を歷訪せられて一時なりとも學校氣分にならるゝは何かの藥とも成るべからんとつく〴〵思合せたり。老ては駿馬も及ばずとかや、況んや余の如き魯鈍成すなき駑馬、研學の諸先輩に對して慚づる處多し、嗚呼止みなん〳〵。

是より先き下平博士の誘に由り能登和倉溫泉に遊ぶの約あり。午後一時四十分金澤發汽車を以て發せんとす。車夫期に近て容易に來らず、辛ふじて乘込むことを得たり。然も勅任教授「プラットホーム」疾走の珍圖を演ぜしめ余も亦驥尾に附して飛んだ赤毛布を學びしも時に取ての一興なんめり。金澤より七尾までは支線に屬し汽車行程約二時間半を要するも、余に取りては初めての風土山川眼に見ゆるもの皆物珍らし。所在なさに停車驛々の名稱を案內記と照合するも亦旅中の一快事なり。

後四時七尾驛に著。自動車を賃して和倉温泉に入り旅館和歌崎館に投ず。蓋し當地第一流の温泉宿なり。豫め電話を以て來遊を通じありしを以て客室の準備既に成る。客樓海に面して築き碧波來て樓脚を洗ひ山光水色欄干に入る。北陸海岸の温泉地として上乘なるもの、其境靜閑愛す可し。一浴後例に仍て杯盤を呼ぶ。人間を出づるの想あるは亦風景地帶の賜なり。往路七尾の城趾を望むで不識庵を懷ふ。吟情勃然たるも腹笥枯渇して句を成さず。能州の好風景に背くの罪や深し。餐後御便殿に至り觀る、樓榭一宇あり、鶴駕曾て幸する所なるを以て此名あり。此地眺望最も佳なり。見渡せば七尾灣收めて一眸の中に在り。此邊の丘山今や山躑躅さては山百合の花盛にて名も知れぬ草花其間に點綴す。夏の花野の觀あり、隨ふ所の樓婢山を攀ぢ蹊を渡り爭ふて花を摘む。樓婢下平博士及家眷と相識る、話は曾遊の跡を尋ねて大持てなり。黄昏に到るの比ひ山を下り寓樓に歸る。簾を捲き欄角に凭りて北海を望めば夕陽將に蒼海原の間に春きて、一抹の紅雲金波銀浪を漂はし宛ながら龍鱗に似たり、晩歸の漁舟滿帆の風を

能登和倉温泉全景

孕ませて右往左往に行き通ふさま、浮ひた鷗にさも似たるも此地ならでは見られぬ圖按なり。居然身は是れ畫中の人たるを知らず。

海洋紅處夕陽春。伏水金波似臥龍。脈々薫風吹不斷。夏雲又見畫奇峯。

波碧水深七尾灣。風光恰似畫圖間。白帆點々小於鳥。一髮青螺鷗背山。

歸來又た浴を取る是れ温泉場に遊ぶ者の行事の一なり。和倉は食鹽泉に屬し、其味鹹苦、之を飲用して胃腸に效驗ありと云ふも、温泉療法の神髓は身心上に及ぼす風景療法？ 吾人の唱道する所の恩澤ある を忘る可からず。余の温泉に遊ぶ常に此意味に於てす。

有水有山又有泉。風光靈浴覺疴痊。如斯良藥無天下。疑是渾身欲化仙。

余の此の稿を草する前數日、富士川醫文學博士餘事を以て拙宅を來訪せらる。談偶〻温泉の事に及ぶ。或種の疾患に對し其の身心上に及ぼす效果温泉に若くなしと云へり。蓋し余と同論なり。富士川博士往年膽石症を患ひ、氣温の轉換其の他に際し動もすれば違和の感ありと云ふ。氏は八月上旬を以て別府温泉に遊ぶの企ありと。温泉薫の增殖は人意を強ふするに足る。而も余は現在日本の温泉場に就ては大意見あり。近日『日本温泉揚改良論』を起稿し、温泉當事者に警告すると同時に其の療病上の意義に就て卑見を述べんとす。

庸哉博士と盛に繪葉書を認め、知友先輩諸家に宛て亂書濫發す。亦消閑の一策なり。夜來風雨迅雷を送り飛電閃々。偶五絶一首を得たり。

與庸哉博士宿七尾城下和倉温泉。其夜送風雨迅雷來。偶然有作。

藻城侍庸哉。欲吊故霜臺。霜臺者上杉謙信之雅號也 天意了吾意。迅雷猛雨來。

此夜睡に就きしは午後十一時に近し、旅夢濤聲に和し恰も「シュルンメルリーデル」（寢んねこ歌）に似たり。

六月四日（火曜日）昧爽自動車を買ふて七尾驛に向て發輙す。十五分程にして達す。發車時間に十數分を剩す。驛夫に就て七尾城趾を問へども彼れ舊蹟を暗ぜず、傍ら人あり、余等の爲めに城山を指呼し、故事を說く頗る密なり。城趾は深樹鬱蒼の中に在り。遙に之を望むで梨を横へて吟詠に耽りし古英雄の雅懷風流を追慕し、長吉一編を賦す。惡詩ながらも記念の爲めに存置し、玆に掲ぐるこゝ三せり。

上杉氏元長尾氏。
奇哉與我姓字同。
今過此地感多少。
無端想起謙信公。」

君家兵法吾看取。
爭覇天下圖何壯。
正々之軍堂々陣。
眞使萬民慕高風。」

片山津溫泉全景芝山潟を望む

千古風流四七詠。送糧敵營是潔裏。兩虎相鬪兩虎斃。勿以成敗論英雄。」去雁來燕五百歲。興亡回首一夢空。」君不見能州之景仍舊美。七尾城趾煙雨中。

金澤に引返し再び下平氏邸に投じ、晝餐後家眷の方々に別を告げ、主人公と相伴ふて西行汽車を買ひ、片山津溫泉に向ふ。遊覽

も中々繁忙にて可成り骨の折れることなり抔と語り合ひつゝ二時間程にて動橋驛に著す。此地より左すれば加州有名の山代・山中溫泉場にして、右すれば片山津溫泉場なり。卽ち此處より馬車鐵道に賃して右す。片山津の市街は近く深樹鬱蒼の間に隱見し樹梢よりして五重の樓臺を遠望し得可し。行程僅に二十五分時に充たす、森本旅館別莊に投す。是より先き下平令夫人の電話を以て我等一行の投宿を報じありしを以て、客室の準備既に成れり。鳥山潟を伏瞰する第一等の客樓にして、氣持よきこと云はん方なし。著後衣帶を解くの遑もあらず、直に小舟を艤して鳥山潟に浮ぶ、蓋し余の此行片山津溫泉の澡浴にあるは云ふまでもなきも、一は齋藤別當實盛公の古墳を弔せんが爲めにして、斯くも行を急ぎしは日脚の既に西山に傾けるを恐れてなり。一揖夫に伴はれて身は早く既に漣波漾蕩の客となれり。瀨岸の池畔一帶は蘆荻洲にして如何にも涼しさうなり。このあたり雀に似たる名も知れぬ小鳥ありチョ〳〵と打囀ぐ聲いとゆかし。舟夫に向て其名を問へばよしはら雀なりと答ふ。よしはらの名は一種の好奇心をそゝり吾等一行覺えず微笑を漏らせり。蓋しお江戸吉原を聯想しての事なり。「吉原雀の里鴉、起きよと啼けば寢よと撞く淺草寺の暮の鐘」……云々の哩謠抔想出し、年は取りても昔の夢の憧れて柄になき恐悅顏に入りしも所謂性慾學者の必然見逃す可からざる好材料ならん。なつかしき吉原雀の啼く音も漸く遠くなり、舟は堀割河線へと漕ぎ行かれぬ。

齋藤別當の古墳は篠原の古戰場に在り。舟を河畔に捨て揖夫に導かるゝ儘、とある松原に入り一老松の下に之を得たり。近者實盛公遺蹟保存會なるもの起り、新に石礎を疊み石垣を圍らし、古墳は老樹と共に其中に藏せらる。別に縣知事の撰文に係る石碑を樹立せり。玆に不思議なるは可成りに高くして廣き石垣は階段を

有せず、爲めに昇降するを得ず、保存の目的は是にて達しもすべきが、碑文も讀めねば古墳を弔ふことも出來ず。宛ながら無口囊の如し。余は犯則別に制札ばこは知りつゝ折角來りしことゆゑ此儘歸るも遺憾と思ひ、石垣を攀ぢ境界を踰越し辛ふじて域内に入れり。現存の古墳は應永二十一年三月遊行十四代太空上人の建立に係る。碑石の文字蝕するも朧けながら讀過すれば左の如し。

前面

南無阿彌陀佛
壽永二年五月廿二日

側面

○○應永二十一年三月
遊行十四代大空上人
實盛公幽魂の化導

後面

極重惡人無他方便
唯稱彌陀得生極樂

六道の苦患を救ふ此六字

唱てくれよ
參る人々

墓前に佇立禮拜時を移す。萬感胸に逼りて躊躇去るに忍びず。手塚山北篠原村。樹老松護古墳。滿地銀沙白於髮。行人揮淚弔英魂。

餘感を殘して實盛公の墓畔を辭し、再び小舟を僦ひて堀割水道を溯り歸路所謂首洗池なるものを觀る。手塚山の山麓柴山潟の渚に在り、池水粘土層より涌出し赭色を帶ぶ。此池元と雜草繁茂する間に在りしと聞けど、今は保存會にて地域を取擴け、新に石堤を築き池の中央に石碑を建つる抔、人工斧鑿の痕ありく〳〵として、甚しく舊形を損じ、故意とらしく見ゆるは懷古の情を喚起するの念何となく薄らやかなる心地す。精神教育の上に多大の關係ある歴史上の名所古蹟を保存せんには可及的舊觀を失はざるやう心掛すること保存の意にも副ふなるべし。實盛塚と云ひ首洗池と云ひ、是等の用意を缺きし嫌あるは遺憾なり。庸哉博士も予と同感と見え機會だにあらば本縣知事に其由話し置かん抔と語り居られたり。樹夫亦た多少の教育あり事理を解す。我等の談話に相槌を打ちて贊成の意を表し、衆人の爲めなり、是非共旦那方の御盡力を望むの外なしと云へり。舟はよしあし繁き池畔を縫ふて例の吉原雀の啼音を聞きつゝ黄昏近き頃森本旅館別莊の裏手の方へと著きぬ。岸に上りて吉原雀の正體を見屆けんと小石礫の類を擲ち見しも小供ぢみて面白かりき。樹夫曰く『彼の鳥は決して人に姿を見せませんと』嘘か眞か知らねど失望して止みぬ。

旅館に歸り何は扨て置き先づ一浴を試みぬ。此泉元と鹽類泉と呼びしかど最近の調査に據れば食鹽泉に屬し溫度六十一度を保ち無色、無臭其味少しく苦鹹、和倉溫泉に比し大同小異なり。承應二年前田利明の發見に係り、當時浴場を設けんとせしも激浪の爲めに妨げられ其目的を達せずして止みたり、文政三年の頃より村民の探酌して澡浴の用に供せしもの、明治二十五年に至り新に浴室を改造して今日に及べり、胃腸病に效驗ありとて來浴する者近時多きを加ふ。地僻なりと雖も境幽にして、前は柴山潟に枕み後は丘陵を負ひ、波光倍色相映じて風景頗る明媚なり。金澤衛戍病院の調査に據れば此泉一「リートル」中に含有する諸成分左表の如し。

固形分總量　一五・七八三〇

「クロールナトリウム」	七・三八四〇	硅酸	〇・二〇六
「クロールカリウム」	五・二三二	酸化鐵及礬土	〇・二二七
「クロールカルシウム」	一・三〇〇九	炭酸「ナトリウム」	〇・〇〇二九
硫酸「カルシウム」	一・二三七〇	硼酸	痕跡
硫酸「マグネシウム」	〇・六五一五	燐酸	痕跡
		硫化水素	〇

余の投ぜし森本旅館の浴槽は目下修繕中なりしも可成りに清潔なり、涌出量も多し。此日は恰も溫泉年中行事の一たる菖蒲祭のことゝて中々に賑へり。浴後晩餐の膳に向ふ。肴鮮にして酒亦美

なり。蓄音機代りにして茜裙の一娘子來て山中節を謠ふ、伊豫ぶしに似て變調なるもの、廊下通れる給仕女の絃調に連れて座席に入り來り、怪しき舞の手振りを見せしは此遊の餘興として蓋し秀逸なるもの、都人士の夢想だも及ばざる所、サテは我等一行は村の阿兄と見立てられたるか、實にや旅路は面白きものなりけり、此夜眠に就きしは午後十一時、白河の夜船前後も知らで熟睡せり。翌朝夢覺むれば枕頭余を呼び起すものあり、是れなん樓婢なり、紙片に何か書き認めしものを持ち來れり、蓋し前夜の娘子軍に山中節の戲曲を尋ねし時、明朝書き送るべしとの約あり、彼れ其約を履むで、態々持ち來れるなり、田舍人の律義なる感服の外なし、怪けな水煮の跡を辿り〳〵て讀み行けば左の如し、土地の人情風俗を知るに足るものあれば鶏肋として書きつけ置く。其謠に曰く、

加賀の片山津温泉名所、西の眺めは藥師山、しば山潟や手塚山から首かけ松やおはな松、海水浴にはいきり濱、實盛塚に參詣して、「ボートレース」や屋形舟、温泉染や丸谷燒、これかわしやんせ。

加賀の温泉に遊ぶ者多くは山代、山中の諸温泉を推し、片山津に遊ぶもの甚だ稀なり。然るに余は何故に此地を選びしやと云ふに、其事由三あり、一は實盛公の古墳を弔はんが爲め、一は父執赤松椋園翁の北游小記を讀み其勝槩を知りしが爲め、一は浴客の雜鬧を避けて故らに靜閑の地を欲せしが爲めのみ。今や其遊蹤を尋ぬるに第一第二條件は其目的を達せしも、第三の條件に至り身閑地に入りて閑を破り、却て俗遊をなす、自ら顧みて啞然たり。

來宿温泉第一樓。肴鮮酒美海山幽。老來豪氣未全滅。休笑閑遊化俗遊。

六月五日(水曜日)口嗽を兼ねて朝浴を試む。泉質清澄にして水晶の如し。温泉に遊ぶ者の愉快とする所は唯此一事に在り。身心洗ひ去て一塵を留めず。澡浴事畢て朝餉の膳に向ひし時の心地は何に譬ん樣もなし。餐後半肩の行李仕度そこ〳〵將に歸程に上らんす。樓婢廚僕見送て停留場に在り。發するに臨むで『お近い内に』の一語お世辭とは知りつゝ惡ろき心地はせず、實にや人情は妙なものなりけり。

朝來得る所の惡詩二三を併錄して後日の備忘に充つ、敢て傳へんとにはあらず。

朝起浴泉人欲蘇。神身洗盡一塵無。此間心境有誰解。忘却病魔在此軀。

半肩行李一身輕。重是今朝上旅程。此地再遊存隱約。泉靈有意記吾名。

我師赤松椋園先生曾て此地に遊び五律數首をものし、更に芝山湖晩眺の七絶一首を賦す。其詩に云ふ。

遠鐘徐度白鷗飛。汀樹依稀帶落暉。雨霽殘雲猶貼水。半湖暮色一帆歸。

正に是れ二十八字詩の上乘、片山津の地此妙絶を得て加州の風景史上千鈞の重を爲す。我鄕の人熊田海陽久しく金澤地方裁判所に司直の官たり、今健在なりや否、海陽は椋園門下の高弟なり。椋園翁の片山津温泉に遊ぶ者、實に海陽の招致に出で翁の宿痾を養はんが爲めなり。今此詩を讀むで舊師を想ひ兼て鄕人熊田海陽を想ふの念や切なり。余追懷の餘り抂けて椋園翁の高韵を蠻ぢて。柴山湖眺目の實況を描寫せし拙作あり。

蘆荻洲邊鳥雀飛。華鯨度水易殘暉。風流時有納涼客。載得滿船笑語歸。

* * * * *

鐵道馬車動橋驛に著す。下平博士之より路を左に取り山代、山中諸溫泉の巡遊を慫慂すること極めて切なりしも、加州淹留四日に渉り、前程自ら豫定もあればと、更に再遊の期を約し、こゝにて惜しき袂を別ち、余は西行汽車に投じて京都に向ひ、下平氏は金澤行の發車を待合せ歸澤さるゝことゝなれり。昨日までも今日までも暫しが程も離れやらず、起臥飲食を共にせし其人とィザヤ汽窗に別れを告げし一刹那は名殘り惜しくもほいなかりし。

此地より米原に至るの間、山又水悉く是れ新生面、右往左往送迎に忙はし、福井に著する迄は此邊の御祭禮とかにて人出多く汽車中殊の外混雜せしも、米原驛に近づくに從ひ、自ら座席の猶豫も出來たり。午後四時三十幾分かに京都著の筈なりし列車は二十分ばかり遲れて七條驛に著す。是より先き田中香涯、高田杏湖の二氏と京都にて會合の約あり、豫め著驛時間を電致しありしを以て香涯氏は態々伊丹より上洛せられ杏湖氏と共に「プラットホーム」に出迎へられしは感謝に堪へず。豐頬肥滿筋骨飽く迄逞しき香涯漁郎と雲突くばかりの長軀六尺有餘の偉丈夫杏湖山人とが雙々打連立て汽窗の外に勇姿を現はせし時は何とも云へぬ嬉しさなりし。京都に於ける旅館は選定を高田氏に委ね置き豫め附するに左の條件を以てせり。曰く鴨河の清流に臨み東山を望み得る事、曰く土地出入に便にして而も閑靜なる可き事、杏湖幹旋太だ努め需めて之を三本木に得たり。來書に曰く賴山陽山紫山水明處の有りし附近なりと、數寄の癖ある予の喜び知る可き也。三名相拉し相伴ふて行く。三本木に到り所謂山紫水明處の石榜ある邊を彷徨せしも、是ぞと云へる旅館を見附からず、辛うじて一屋を選び車夫をして明間の有無を尋ねしめしに、生面の客なりしが爲めか、滿員の故を以て門前拂ひを食はされたり、宿無し左衞門と成り果てし我等は評定區々、杏湖の發議にて、先般渡邊相竹軒主人の宿泊せしと聞及ぶ旅館に入ることゝし、電話を以て其都合を問合せしに展を倒にして相迎ふとの事にて漸く宿巢の出來しを打喜び、又もや素と來し路への逆戻り、山雀の藝當にさも似たり抔と打興じつゝ歩を運ぶ。元來京都通であるべき筈の杏湖が東道の任を盡さゞりしは近來の大失敗なりしとて頭を抱へて萬謝するも、是れ杏湖の杏湖たる所以にして其無邪氣なる所愛すべく掬す可し。余に取りては求めて得難き御馳走として旅行中特筆大書す可き一異彩なりと激稱せり。蓋し杏湖の意余をして賴山陽の舊蹟たる山紫水明處附近に眠らしめんとする凝り性の眞一文字に結晶して終に旅館の事を忘却せしなり、仙味を帶ぶる人にあらずんば、焉ぞ此失敗を敢てせんや、平然として豫定の旅館に入る凡の凡なるもの、興味は不用意の間に油然として涌く、所詮彌次喜多一流の旅行、天與の餘興ありと云ふ可し。此夜香涯氏と枕を聯ねて七條旅館の三層樓に睡る。是れ此樓旬日以前には相竹軒主人の遊蹤を留めし所、知らず我雄文社と何等の因緣かある。三人鼎坐相語り相談ず、會心の友と會心の事を話す、人生の快事何物か之に若かん。杏湖とは四月入洛の際一寸面會せしも、香涯と相見えざること正に半ヶ年、談は夫れから夫れへと盡くる所を知らず、七條旅館は臨時編輯打合會議の觀あり。想へば三人者共に兩三年前までは未知未見の人にして唯文字の交を訂せしのみ。フトした動機から共に本誌を經營し、又た編輯を幇け吳るゝ特別寄書家とはなれるなり。志相同じければこそ天涯地角の地域に在りながら猶ほ合璧に似たり、不思議の因緣と云はまくのみ。談は盡きねど杏湖は更闌なる頃辭して家に歸り、余は久振にて香涯兄と同宿の夢を結ぶことゝなりぬ。

臥戸に入りて後も猶も談話は續けられ、一語は高く一語は低く遠く聞ゆる夜警の響を添乳とし何時とはなしに深き睡に入る。

平日相逢相遇稀。朝々暮々雁書飛。今宵交膝却無語。笑對東山

群落暉。

六月六日(木曜日)五時起牀香涯兄と又快談に耽る。朝餐後余は京大に赴く用件あり、香涯兄と茲にて惜しき袖を分ち兄は伊丹に歸られ余は直に車を馳して京大に向ひ、荒木總長を官邸に訪ふ、用談を濟ませて後風流談に移る、鳳岡博士の手厚き待遇と城府を設けざる應接振りには毎度恐縮の至りなり。近作の漢詩を示され、君に見せるものがあるとて幾度か書齋に馳せ入り、唱和の詩箋を示さるゝ抔其無邪氣なること惚々する心地す。出勤前のことにしあれば良い加減に辭し去らんとすれど中々に歸さず、余は強て辭せんとすれば然らば一所に行かんとて余を大學事務室まで伴ひ行かれ、伊藤博士の在否を事務員に命じて電話にて問合はさるゝ等斡旋太だ努めらる。博士の爲めに種々なる便宜を與へられたるは感謝に辭なし。茲にて鳳岡總長に別を告げ、余は外科教室に伊藤學長を訪ひ用件を濟ませり、伊藤博士を應接間に待ち合せ中挨拶に來られし年若き醫員のいと鄭重に取扱はるゝを不思議に感ぜしが名刺を差出さるゝを見れば、原田醫學士とて田中香涯兄の愛婿ならんとは。余は今しがたまでおとうさんと御一所に居て昨夜は某旅館に同宿せしなり抔物語れり。世には奇遇もあればあるものかな。昨年京大を卒業せられ今は伊藤外科にて專ら研究中なり。此日和辻博士を訪問の筈なりしも伊藤氏より聞けば新潟醫專に出講の爲め昨日出發せしとの事にて面會を得ざりしは遺憾、外科教室を出で昨夜の約を履むで高田香湖君を法醫學教室に訪ふ、臨牀科より此處に來れば仙境に入るの想あり、是ぞ仙味を帶びたる主人公の根據地なり。匆々にして辭じ去り旅館に歸りて行李を整へ直に七條停車場に赴き大阪に向ふ。大阪著後鳥潟博士を訪ふ可く大阪醫大に赴きしも、不快引籠中とのことにて去て高安博士を道修町の邸に訪ひ、次で長野博士を訪ひ、更に鳥潟博士を自邸に訪ふ、鳥潟氏病を冒して特に面接されしは感謝に堪へず、是にて略大阪の用件を了したれど、猶ほ木村孝藏博士に面會の必要あり、時後れたれど暮夜を衝て天下茶屋の邸に訪ふ、靜養中とのことなりしかど特に引見せられ、要談一時間餘直に去て梅田驛に向ひ岡山行の夜行汽車に投ず、今日は隨分多くの人々に接したることゝて中中に疲れたれど、氣澄みて車中碌々睡も成らずうつら〳〵の中に夜を明かし翌朝五時岡山驛に著す。

六月七日(金曜日) 岡山驛前の旅亭に小休し朝餐後岡山醫專の筒井博士に電話し、餘りの早朝なれど行程を急ぐ旨を述べ其都合如何を質せしに、「直に來れよ」との事故車を飛して訪問せり、筒井博士とは深き昵みの事とて何等の遠慮もなく先づ以て用件を述べ終りたる後、一別以來の久濶談に時を移し、將に辭し去らんとすれば、『是非共醫專新築の敷地を見て呉れよ、今日一日は緩る緩る遊むで行かうではないか』と令閨共々引留めて止まず、然らばセメテ敷地丈は拜見して行かんと雙々車を列ねて城外に向ふ、新にトせる醫專新築用地は中々廣大なるものにて地勢亦た宜しきを得たり、筒井博士例の快活なる辯を振つて說明案內頗る努む、兼て聞く某富豪の寄附に係ると云ふ物理學教室は既に大半落成せり、說明茲に及んで博士の得意想ふ可く聲は益々高潮に達せり、筒井氏が前校長菅氏の後を享けてこゝまで漕ぎつけられしは成功と謂ふ可し。建築事務所に小憩の後、縣病院に引返し荒木蒼太郎君に面會せんと筒井博士に伴はれ其醫局を訪れしが風邪の爲めに昨日より引籠中なりとて面會を得ざりしは殘念なりき、荒木君の醫局が飽くまで荒木式を發揮し居れるは今に於て忘る可からざる印象なり。筒井校長と茲に別を告げ余は午前九時幾分かの下の關急行車に投じて西下、午後關門海峽を渡り熊本に直行す、二晩汽車中にて夜を明かし翌朝午前四時三十分頃熊本に入る。

六月八日（土曜日）　熊本に著くは著いたが天未だ明けず、汽車中偶然熊本市の醫師某氏に面會、旅館を紹介し呉れしも、其旅館までは彼是れ二十町もありと云へば、余は意を翻して熊本見物と出掛け、車夫に命じ『汝の欲するがまに〳〵熊本名所を案内し終りに水前寺に行分よ』と一令せり。車輪輕く曉煙を衝て先づ遊廓地を突破し有名なる清正公の御廟本妙寺へと向ふ。寺門に達するの比天全く白し。寺前の茶亭に小休し線香抔を買ひ求め黑門を入り長き石段を上り詰め忝しく廟前に靈拜す、堂内には通夜の僧あり。題目を唱ふるの聲喧しく朝參の詣人參々伍々境内に來往す。幔幕に染抜たる○の紋所、さては所々に賣顯げる公の肖像畫等を見るに附けても藤肥州當年の颯爽たる風姿を追想し、英雄の末路を弔し轉た感慨の情に堪へず。さるにても三百年の久しき香火の綿々として斷へざるはセメテもの心遣なり。源九郎や藤肥州や幼年時代より歷史小説に敎へられ、軟弱なる頭腦中に刻印打ちし意中の人として、今此地を過ぎて躊躇低徊去るに忍びざるの至情に咽ぶも強ち無理にはあらず。

本妙寺邊曉色凝。穗光明滅佛龕燈。木魚聲斷滿山靜。半朽門前有老僧。

此地を辭して更に車を水前寺方面に飛す。蓋し本邦林泉中有名のものにして兼て一遊を試みんと思ひ居たればなり。綠陰淺水の畔に在る一旅亭に就て朝餐を命じ、車夫と共に風光を愛でつゝ空腹に肥せり。此園泉石の美、流石は舊藩公の別墅なりと頷かれたり、詳細は管々しければ玆には述べず。水前寺を出で熊本醫專に藤井博士を訪ひしに講義中なりたれば暫し待合せ自宅に招ぜられて面會、玆にて所定の用件を濟ませ、更に去て赤松純一學士の邸を訪ふ、學士は曾て面識のある間柄にて、特に六華閑人より余の鎭西行を通知しありしことゝて日々待受けられたりとの事なり。

令夫人共々いと慇懃に迎へられ鑄かりき。今日は病院に差したる用もなし何處かにて午餐を共にせばやと誘はれたれど强て辭して歸程に上る、蓋し太宰府の菅公廟に詣でんが爲めなり、氏に下車驛を問ひしに二日市と二十日市の間違にて是を訂正せんが爲め門外の橋上まで追ひ驅けられし風姿の如何にも卒直なる今尙ほ眼前に彷彿たるを覺ふ。余生來威張る人間は大嫌ひ、赤松氏の此態度が頗る氣に入りたり。

熊本驛より汽車し、二日市に下車輕便鐵道に賃して太宰府に入る。是亦た余が積年の宿望を果せし一なり。太宰府神社に詣し、此地に一泊せんと思ひしかど、旅館らしき旅館のあるなし、引返して直に福岡市に向はんと思ひしに輕便車中武藏溫泉の勝を耳にし、例の溫泉病はむら〳〵と發作し來り、今夜は此地に宿ることゝし、導かるゝ儘武藏溫泉の一旅館紫館に入る。

武藏溫泉全景（天拜山を望む）

武藏溫泉は九州鐵道二日市停車場より南十町、御笠郡二日市村大字武藏字湯町に在り、單純泉に屬し無色透明、無味無臭、溫度百十四度、泉は武藏川の河底より涌出するものを導ひて浴場となす。地風光の賞す可きものなきも南に天拜山を望み翠光嵐色亦た

一顧の値なきにあらず、天拜山は菅公遺蹟の存する所なり。此温泉白鳳年間の發見に係り、口碑に據れば菅公太宰府の謫居中屢〻來浴されしと傳ふ。

武藏温泉は一千年の其昔、菅公の謫居中屢〻湯あみされしと云へること何となくなつかしく、温泉の來歴を知ると同時に偉人崇拜の念慮に驅らるゝも我國民性と云はまくのみ。晩來雨さへ降りしきり寒を開て天拜山の彼方を打望めば、心なき雲は山脚を封じて樵路斜めに通ずる處、頂上に松の一基の見ゆるはあれぞ菅神祈禱の舊蹟なりとて樓婢の指示すも其聲いとゞしめやかなり。余は一浴後晩餐の膳に向ふ、こゝら當りは關東附近の温泉場とことなり、質朴疎野の風いたく氣に入りたり。食後繪葉書抔を買ひ集めあれやこれやの品定め筆に任せて下らぬことを知友の下に書送るも余が道樂の一なりけり。

遊武藏温泉。懷菅公遺趾。

都府樓南二日市。地涌温泉呼武藏。浴槽疊成花崗石。水麗質清好洗腸。聞說一千年前昔。菅公屢來澡斯湯。行人到此咽暗淚。追懷往事感慨長。無罪空吟配處月。宰帥之職是虛名。夢魂幾落清涼殿。立捧御衣拜餘香。勿云菅公之賢猶戀權勢。忠誠未曾肚腹忘。魂魄日夜侍君側。終生之志在廟堂。天道不知非乎是。濡衣未乾空北邙。唯有千歲知己在。偉名長與梅花香。我遊樂紫宿此地。維山維水感無量。仰望天拜山分巍然聳。逼寰皆色仍舊蒼。

（未定稿）

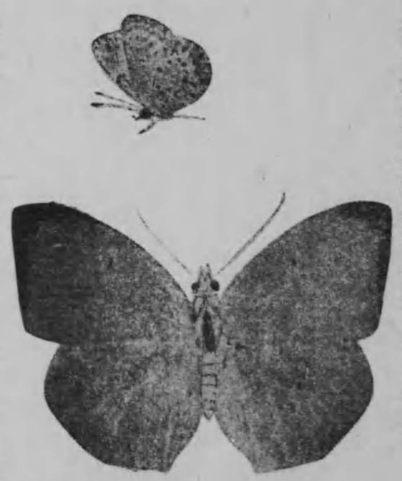
此夜はいとも眠心地よく熟睡曉を徹す。

客中作客々情饒。野鶴閑雲天地遙。孤館夢安靜聽睡。碩寰々外雨蕭々。

六月九日（日曜日）朝起一浴後仕度そこ〳〵旅館を出で二日市停車場に向ひ、福岡驛までの切符を買ふて上り汽車に投ず。八時過

ぐる頃博多驛に著す。直に車を傲して大名町に三宅速博士を訪ひしに博士は朝鮮醫學會に出席せられて未だ歸福されずと云ふ、此事は兼て承知せしも萬一を僥倖として訪問せしもの、豫め覺悟はしつゝも今更のやうに思はれいたく失望せり。遺憾を殘し門を出でゝフト思付しは兼て藤根不忘居士よりの添翰もあり、福岡に行けば是非稻田博士に刺を通ぜよとの事なりしゆゑ、三宅邸に直ぐ向へる稻田邸を訪づれしに愛憎不在にて面會を得ず、こゝにて取

此圖は實物を以て巧みに繪葉書に調製されしものに係る



ウラナミシロチフ　ミヤシコ

Catopsina Pyranthe L. Lycrena argus L.

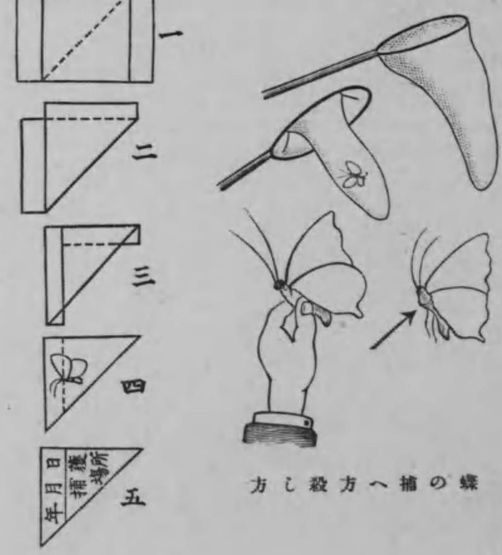
此「ウラナミシロチフ」は一に「フキリツピンテウ」とも申し從來琉球以北にては發見せざりしもの昨年小生福岡にて拾頭ほど捕え分布が擴り候、但し一ヶ月間日中辨當持にて通ひ申候、呵々。（久保博士書信の一節）

次の人に久保博士の家路を委しく尋ね、車を捨てゝ徒歩同町内なる久保博士の門を叩く、門前に一輛の車あり、偖ては先客あるにや但しは主人公の外出間際なるにやと、暫し思案に打呆れつゝ玄

關先に待間程なく、心きゝたる取次出で來り少し時間の掛る遠來の客あり、なるなれば黄昏頃再訪せられまじきやとの事なり、余は直に引下らんと思ひしかど、用件は約十分間位にて濟むことゆゑ一寸にても面會願はれ間敷哉と無禮とは知りつゝ押强くも再願せり、再願は幸に許可せられ今度は博士自身に出迎えられ立派なる應接間へ導かれたり、茲にて先づ寒暄を敍したる後手取早く來意の要件を述べ終り、今や辭し去らんとする一刹那談偶〻博士の蝴蝶研究の事に及びしに博士は眼を聞くして『貴所もそう云ふことをお好き』ですかと云ふ。余の如き木强漢素よりさせる趣味あるにあらねど『萬更でもありませぬ』と答へた。此時博士の云はるゝに『實は奥へ來て居る遠來の客と云ふものも其蝴蝶に關する珍客で佐賀の池田陽一博士である。お構ひなくばごうぞこちらへ』と奥の廣々とした座敷へ通ふされたり。主人公は余を池田博士に紹介せらる余は初對面の挨拶を濟ませながら、そこら當りを眺むれば、系統的に分類された蝶の標本、さては英國で少部數を限て出版されたと云ふ善を盡し美を盡した見るからに眼の覺むるやうな參考用圖譜等は所狹しと取擴げられ居り、身は莊子ならなくに蝴蝶化せんとする境遇に封ぜられたり。而も博士の研究は空想的抽象的のものにあらずして悉く科學的基礎の上に確立せる斯道の爲めに有益なる業績たることは歴々として實物が之を物語つてゐる。數千に度る分類を有する蝴蝶の分布が植物と密接の關係を有して居ることや、それが無論地理的地方的面白ひ連鎖を持つて居ることやを親しく説き聽かされた自分は、見ること聞くこと悉く初耳なので唯々驚嘆の外なかりし。導かるゝまゝに別室に行つて見ると、茲には蝴蝶の培養設備がしてあつて、種族の絶ゆる虞ある珍種類のものに向ては之を蕃殖せしむるの用意あり。されば其貴重なる標本には夫々蝶の生年月日が記されてある抔夫れは〳〵

行度つたものなり。

邸内の廣ひ庭園には四季の花草を栽え、色とり〴〵の眺め、今や其花盛りである。聞く所に據れば花を培ふは蝶を捕えんが爲め



蝶の捕へ方殺し方

蝶の包み方

捕蝶方法及び發送法

蝶を捕るには網を用ふ、網にて捕へたらば蝶を網の上より殺す、殺す方法は圖の如く蝶の胸卽ち脚の生じ居る所を左右より親指と示指との間にて靜に强く壓迫す、決して腹部を壓すべからず、然る時は腸を脱す、又羽を捕ふ可からず鱗屑脱するが故なり、斯くして死したるものは羽を背中合せに疊みて紙に包む、紙の折方は圖の如くし紙の表面には捕獲年月日と地名とを記す、之れを木の小箱に綿を敷きて其の中に重ねて入れ蓋をして博物標本として郵送す。

であつて、滿園苑から千紫萬紅の自然の網を張りたるの觀あり。時しも一匹の蝶が飛むで來た、主人公は『一寸失敬します』と取る手遲しと捕蝶器を携えて意駄天走り、何たる無邪氣サ加減であらうか、蝴蝶研究の爲め浮身を窶さるゝの樣傍で見る眼もいぢらしき樣なり。是此人一面に於ては九州醫科大學の教職に在るの人、嗚呼人生は趣味に生く、久保博士の如きは慥かに其神髄を解する者人間の半面には斯うした安全瓣がなくてはならぬと、つくゞ〳〵感服の外なかりき。茲にて午餐の饗を受け令夫人が手づから栽培されたと云ふ心籠られたるイチゴの御馳走に舌鼓を打ち更に明朝教室の再訪を約し將に辭し去らむとす、博士余が爲めに旅館の選定、福岡名勝巡覽の道順等を圖示せられ、且つ曰く、此地別に見るに足る可きものなきも、西公園に玄海灘を望み平野國臣翁の銅像を見、去て今川橋畔金龍寺に貝原益軒先生の墓所をも教示せられたり。即ち博士にすやと、尙龜井南溟先生の墓所をも教示せられたり。即ち博士に一揖し傭ひ呉れたる車夫を東道の主人公となし巡覽先づ西公園より初まる。園に達するの頃より細雨霏々、衣襟の濕ふも知らで風景愁に纏著するも亦旅中の一奇なり。西公園は白砂青松に包まれたる高丘の上に在り。聞きしに違はず玄海灘の展望甚だ雄大、平野國臣公の銅像巍然として聳立する處、海波來て岸壁を洗ふ、其聲怒號。ものすごくも亦壯快なり。

望斷海洋舊石磯。波光濤影袒吟衣。忠臣像畔日將暮。啼雨晩鴉穿樹飛。

こゝにて博多人形繪葉書抔を買ひ求め、車を急がして金龍寺に向ふ。寺は博多の西端盡くる所に在り、即ち墓所に就て貝原益軒先生及内室の墓に詣づ、極めて質素なるものなり。墓前に禮拜稍久ふして、更に去て這次新設の銅像を觀る。彌や高き臺礎の上に安置されたる溫乎たる坐像は、見るからに楚々人を動かし、瘧

然として襟を正ふせしむ。嗚呼古今大德の人、百世の下に及ぼす感化力や偉大なるものあり。躊躇佇徊暫らくは去りもやらず、一種の感慨に咽びしも亦た人間の至情なれ。

余は此寺に入て異樣に感ぜしは墓所の荒廢に歸せしと云ふにあらねど、掃淨抔の行き屆かざること、銅像附近の手入れの足らざることなり、されば墓前に立ちし一刹那、覺えず左の悪詩を口吟みし程なりき。

貝原益軒先生及内室之墓

萱靜禪門無客過。
金龍寺畔感如何。
薫風空拂偉人墓。
香火斷邊雜草多。

然るに兼て久保博士より聞及びし是寺の住職藤崎禪智師に面會せんと案内を請ひしに、取次に出でし一老媼はいと打萎れたる面貌にて語るらく『住職は畢生の努力もて貝原先生の銅像建設に熱中し、其甲斐ありて立派に出來上りしが不幸にも除幕式に間に逢ひ兼ねて入寂せり、今にして思へばあれがせめても心遣りとはなれり』と。この意外の言葉にて、語り終りて雙の瞼に涙さへ打含めり。余は其談話を聽きて貰ひ泣きせんばかりに打驚き、『御病氣は？』と問へば『最初は胃病とのことなりしが福岡病院の稻田博士の御診斷をも受け胃癌なりしとのこと

なり』。胃癌と云へる語は余に取りては一種の響を以て聞取られぬ、我家由來癌腫系統に屬し、兩親共に此病を以て逝けり。かゝることより同情の念彌が上にも彌まし、實は或人より住職の事を承り面談せんと樂むで來りしものなりと云へば、老媼はたまり兼ねしと見へ傍にありし雛僧を顧みながら鼻打ちかみ聲を出して嗚咽し初めぬ。余はこれはしたりと思ひ直し、話頭を轉じ貝原先生の何にか遺品でもあらずやと云へば、畫像及繪葉書抔を示されたり余は其幾組かの分配を乞ひ、去るに臨むでセメテは住職の佛前になりと禮拜して歸らんと思ひ、其旨を通ぜしに老媼は佛間にと導かれ住職の寫眞抔をも示されたり、卽ち心ばかりの香奠を備へ、默拜を終り、餘感を殘して寺門を辭せり、老媼雛僧等交々見送りいと親切に取扱れたるは心地よかりし。

金龍寺を出で淨滿寺を訪ひ茲に龜井南溟先生の墓に詣す。歸路住田正雄博士を訪ひしも不在再訪を約して、東中洲の水野旅館に入る。此旅館開業日猶ほ淺きも評判善き家なりとの事、特に久保博士よりのお聲がゝりのお蔭にて故ら最上等の客間を明け呉れあり、待遇餘りに鄭重にして多少難有迷惑の氣味なきにしもあらず、貧乏醫者聊か頭痛の筋合にて思はぬ心配したりけり。晚餐後東公園に遊び有名の箱崎八幡宮に參詣せり。歸路鳥居前にて從弟某の九州醫大に在る者の家を訪はんとし、其道順を尋ねんと、一學生を見付け背後より聲を掛けしに其學生こそ余が訪はんとせし從弟某ならんとは。是ぞ箱崎八幡宮のお引合せならん抔奇中の奇遇に驚けり。卽ち相伴ふて海濱に出で半時間ばかり風光を觀賞し、電車を賃して歸福、福岡の繁華の場所を散歩し旅寓にて久振りにて小酌を試みたり。異鄕に在りて家鄕の人に逢ふさへ嬉しきに、骨肉につながる人間と差向ひ、何の遠慮もなく親戚の動靜を語るほど樂しきはなし、同人も本年は最早卒業期なれば前途の事など懇に諭し置けり。此夜眠に就きしは午後十一時。

六月十日(月曜日)午前九時久保博士を九大耳鼻咽喉科教室に訪ふの約あり、電車を賃して千代の松原に下車、直に九大に赴き其境内を一見し、時刻を計りて久保博士を同教室に訪ふ、快く出で迎へられ正午過ぐる頃まで其教室を隈なく案内、而も說明の勞を自らせられたるの厚意は感謝に辭なし。其詳細の狀況を逐一記述せんは到底此小記行文の能くする所にあらず、今其最も感得せし二三の點を摘記すれば、新築とは云へ日本に於ける三大學中(京都醫大は能く知らねど)耳鼻咽喉科として設備萬端の能く行屆きしものは先づ以て九州大學を以て第一と云ふに憚らざるなり。是れ余が溢美の言にあらざるのみならず、久保博士の厚遇に醉ひての詔言にもあらず、恐らく天下の公評ならん。先づ以て特筆す可きは帝國最高學府としての眞生命たる「リテラツール」の最も嚴密に最も精細に蒐集されあるの一事は恐らく他の企及すべからざる所ならん。余等門外漢專門的觀察に於て迂なるを免れざる可しと雖も、發程前數日朝戚たる醫學士廣瀨涉氏(東大出身)余の門を叩て曰く、九州へ行けば耳鼻科の模樣を視察し來れよ、「リテラツール」の蒐集蓋し全國一ならんと。知る可し、九州耳鼻科の名聲赫赫たるや廣瀨氏の言以て徵するに足る。其他無響室の如きも恐らく他に類例を見ざる所ならん、若夫れ手術室の設備及清潔法の完全なる曾て東大耳鼻科に於て乳嘴突起の手術を目視せしことある余に取りては隔世の感なきを得ざりき。

耳鼻科を辭し、石原博士を生理學教室に訪ひ、去て住田博士を整形外科に訪ひ、住田氏の紹介にて稻田博士に面會、是にて福岡に於ける用件を果し、旅館に歸りて行李を理し直に福岡停車場に向ふ、從弟某及管店等來りて見送りたり。

行程之より遊覽專門となり、別府溫泉迄の切符を買ひ、先づ以

で耶馬溪の景勝を探らんとし中津下車の目的を以て發程す。小倉驛にて乘換へ豐後線に移り中津に著きしは午後八時過ぎなりき。福岡の旅館よりの指定旅館ありしなれど、下車して聞けば其旅館は廢業して割烹店專業と成りしとのことにて停車場附近の旅館に入れり。勝手知らぬ旅客に行先地の旅館を紹介するもの心地すべきことゝ思へり。余の宿泊せし旅館は商人宿なれど結句氣安立てにて心置きなく明朝一番輕便鐵道にて馬溪行を樂みに此夜は安らけき眠に入る。

六月十一日（火曜日）朝起午前六時幾分かの輕便鐵道により馬溪に向ふ。蓋し馬溪に赴く軌道鐵道二條あり、一は宇の島よりするものと一は中津よりするものとなり。余は中津線を取る。此線を以て至便なりとす。古城、上ノ原、眞坂、野路、樋田の各驛を經て羅漢寺驛に下車。車を買ふて直に羅漢寺に向ふ、馬溪に遊ぶ者深耶馬溪の勝を探るにあらずんば馬溪を語るに足らずとは衆て聞く所にして余も亦た其心組なりしも天將に雨ならんす、故に止むを得ずして再遊を期し、馬溪の玄關口たる羅漢寺見物に止めたるなり。山容水態の梗概を知るに於て亦た遺憾なきなり。馬

耶馬溪山絶勝之一（人形岩）

溪は十三村の總稱にして景勝は樋田より初まる。先づ耶馬三飛の一たる犬走りの急流を探り、耶馬橋を渡り順路羅漢寺に向ふ。其間仰ぐ競秀峯を望めば無數の危巖石骨天際に屹立して其奇其怪名狀す可からず、山陽翁の筆捨所は柿坂附近なりと聞けど余は早く既に此地に於て拙筆の之を傳ふ可き言辭なきを覺えたり。

羅漢寺に到るの間石門あり、洞窟あり、奇絶快絶妙絶の三絶を極め一歩にして一景移る。全山皆な骨を露はし石を以て衣となす碧羅其間に點綴し、絶て土なき所に樹木の亂生するあり。羅漢寺緣起の一節に曰く。耶馬溪にして羅漢寺なからん乎、活龍の潭水を得ざるが如く、羅漢寺にして耶馬溪在らざる乎、猛虎の嶋岳に靠らざるの感あらむ、此溪此寺兩々相待ち彼此相携へて内外探勝家の心目を娛ましむるに足りなん云々。此言眞に我を欺かず、寺は千二百六十餘年の活歴史を有し、其緣起は玆に述べざるも炎天六月夏猶ほ寒き仙境清泉涌く處、洞門を潛るの時肌膚爲めに粟せんとす。堂前に一詣し、案内を請ふて洞窟内に入る。蓋し一奇觀なり。若夫れ羅漢寺の奥書院岸角に聳ゆる一樓臺に立ち四方の風景を嘯下する處、身は宛然として南宗畫中の人たるの想あり、愛を割て寺を辭し前程を蹈み、羅漢寺驛に著し、競秀峯下の石門を過ぎ樋田驛に至る。此間馬溪の舊道に屬し一方は山一方は水にして絶景云はんかたなし、樋田の一小亭に就て小休、麥酒一罎を傾倒す、余に取りては近來の大出來にして又た風景の賜なり。

余は馬溪遊記の筆を收むるに當り、玆に附載するの要あるものは客年三月九州に一遊せし高田杏湖氏の記行文の一節なり、杏湖氏の記行文題して『九州一瞥記』と稱し、杏湖一流の奇警なる筆に成りしもの、當時其稿本を手にして之を公にするの期を失し荏苒今日に至る、今や此機會に於て馬溪と別府に關する氏が觀察の一斑を摘載して光彩を添ふと同時に余の記行文の缺を補ふことゝせ

り、其馬溪に就ての一節に曰く。

耶馬溪は、南畫の山水を「ステレオスコープ」にて見るが如き點に於て、正に山陽の云ふが如く「耶馬溪山天下無」にして、「余詩文笨粗、不足狀其髣髴、況畫乎、後有能者如董巨倪黃之流者、躡其境而補成之、庶幾不負此山水、然目此山水爲海内第一者、乃自耀子成始、」と、近頃やかましき「オリヂナリテート」を既に百年前に主張せるも無理ならず。青の洞門や羅漢寺の如きは「人工のみ」と喝破せるも亦同感なり。されど、今の訪客は多くは羅漢寺を訪ひて山陽の激賞せる所を見ず。否其訪客も、亦甚稀にして、別府の溫泉に蝟集するもの多きは、抑何ぞか申すべき、耶馬溪の山は、石多くして土少きを珍とすべく、所謂山骨曝露せるものなり。土は夫れ山の肉にして、草木は夫れ山の皮膚に生じたる黴か。途次、福岡の法醫學教室を參觀せしに完全なる屍蠟の標本多くは、此邊に於て發見すと藤原助教授の說明ありしが、耶馬山も亦、地球の屍蠟ぞいふべきものか。

羅漢寺の寶物に「鬼」と稱するものあり、人の說明を綜合して考ふれば十二、三歲の男子の木乃伊なるが如し。行を急いで見ず、後に之を聽く遺憾なり。

中津より柿坂に至る輕便鐵道の終點なる、山陽の鄕筆案に入る前に城井といふ驛あり、「キイ」と訓す。里翁の說明によれば、中津に奧平氏の築きしより以前、未だ築城に石垣を用ひざる昔、此處の山上に城ありて、城に到るには、唯一條の巨巖の裂隙の小徑有るのみなり、と。車窓より親しく其間道を示指す。近頃何事にも「ローマンス」といふ言葉を濫用すれど、これは正しく純然たる古城の「ローマンス」なり。城井驛に註して「平田城趾東四町」とあり、山上の春、管絃に歡樂の盃を酌みて後幾星霜を經たる。「只今惟有鳧鴨飛」といふも古し。

耶馬溪の奧に新耶馬及び裏耶馬出來たりと、聞けり、恐らく曉近新馬鹿或は薄馬鹿の流行すると同一筆法か。素と馬鹿を好みて、新馬鹿、及び薄馬鹿を好まざる余は、又新耶馬、乃至裏耶馬に杖を曳かずして南大分に向ふ。是れ同寮立川氏を訪はんが爲なり、車中、里翁余に告ぐらく、「此輕鐵はトンチル」は多いが、石山だから繰拔いた丈で、煉瓦を積む世話はいらず又地盤堅固なれば地ならしをも要せず。從て安價に出來上つたもので す」と。果然、山陽の先見の明は裏書きせられたり、人工になれる青洞門は其價値を減ずること甚し。

高田氏の馬溪觀は如何にも透徹的のものなり。余の月並式馬溪觀の如き脚元えも追ひ附けず、彼是對比し來れば殆んど顏面あるなし、されど風景觀は各人各樣の見地より下せるもの、而かも風景の觀賞は概括的なるを要す。如何なる美人も皮膚の組織を顯微鏡的に吟味すればお座の覺むるものあらん、富士山は我國の名山なるも御鉢廻りの際見ゆる頂上の鎭火灰は殺風景のものならずや、美人も富士山も其風致風韵は所詮遠望の間に在り、油繪は近て見れば「アザマ」なるもの也、二三尺隔てたる所に繪畫の妙味は存するなれ、高田氏の馬溪觀は透徹的なりと雖も、畢竟法醫學的觀察たるを免れず、古往今來名勝地として存する場所に强て批難を容るゝにも當るまじ、我は深く贊せず、若し夫れ純然たる山岳論より云へば備中の豪溪遙に馬溪の上に在らん、然れども亦は自ら別問題なり、鄕に入ては鄕に從へ、馬溪に遊むで馬溪を激稱する所に微妙の心理も含まれ居るなり、余は馬溪の青洞門は矢張り青洞門として通用させたし。我等の觀光旅行は地質學的の檢索にはあらず。一言馬溪風景の靈に代り辨じ置く。

余は樋田驛より輕便鐵道の便に由り中津に引返したる後、下り列車を買ひ宇佐驛にて途中下車し輕便鐵道に賃して官幣大社宇佐

神宮に參拜す。殿堂の修覆新に成り廟宇の壯嚴華麗なる眼も覺めんばかりなり、神護景雲年間に於ける皇統の危機に際し、和氣清麻呂朝臣託宣の誠忠皇基を萬世の下に全ふせし事蹟を想起し、凜として秋霜烈日の感に打たれたり、俯仰襟を正し、心を淨め堂前に跪坐し、想を一千年の古に馳すれば神威嚴として今尙在ますが如し、餘感を殘し前程を引返し、更に南行汽車に投じ別府に向ふ。車中大阪より來れる一隊の團體客あり、賛六辯の喧騒甚しく燕語喃々堪ふべくもならず、余心中私に謂らく、是等の連中と旅館を同ふせんか靜養の爲にする旅行に閑寂を破るの恨あり、若かず彼等の宿泊する所を確め之を避くるの策に出でんと。聞けば彼の連中は日名子旅館に入ると云ふ、日名子は別府知名の旅館なり、余も亦其目的なりしかど俄に旅館の變更を思立ち、下車の後決定することゝせり、黄昏過ぐる頃別府驛に著す。卽ち車夫に命じて山に面し最も閑靜なる旅館に案内す可き旨を命ぜり。車輦の向ふまに〳〵田の湯館へと導かれぬ。餘り上等の部にはあらざるべけれど余の希望條件を充たし得て餘りあるを打喜べり。何は偖て置き先づ一浴、浴槽も可成りに清潔なり。浴後晩餐の膳に向ふ。余の大好物たる紅角老の「フライ」に舌鼓み打つ。魚介の新鮮なるは蓋し此地の一特色たり。永々の道中に多くの人々に面會し、多少の氣兼氣苦勞もありしもの、ヤレ〳〵と思ひし旅の疲れの一頓に出で來り、此夜は「ユックリ」と打くつろぎ前後も知らで熟睡せり。

六月十二日（水曜日）朝起窗外蕭々の雨聲を聞く。愛憎とは思へど靜養には屈竟と無理理窟を附くるも癪我慢とは云へ旅中には能く有り勝の實際談なり。正午近き頃より雨全く歇みぬ。則ち車夫を傭ひ別府の市中見物と出掛けたり。

別府の溫泉地帶とも云ふ可きは中々に廣し、鐵輪（カンナワ）・明礬・新別府・龜川・觀海寺・堀田溫泉等別府町附近二里四方に亙る。そを悉く跋

渉せんは一夜泊の旅客の能くする所にあらず、余の車上見物區域は別府濱脇間に限れることゝ知る可し、別府溫泉の特色は泉源の豐富なるに在り、二十四時間の涌出量約三萬石泉泓千百五十餘個所と註せらる。湯の上に浮ぶ街てふ別府の別名は眞個に空しからずと謂ふ可し。浴湯の種類は頗る多く砂湯十三個所、蒸湯四個所臥湯三個所、湯瀧一個所、海濱砂湯二個所、其泉質は炭酸泉、硫黄泉、鐵泉、鹽類泉等隨所に涌出し、丘陵溪谷海間の別なく到る處溫泉の涌出するは日本全國此地を措て他にあるまじ、最も愉快なるは別府町立共同溫泉なりとす。一錢の賃錢を徵收せず、來者不拒、階級制度を超越した平等無差別の大公開溫泉場たることは別府町民の誇とする所なり。斯の如き公開溫泉場は市内到るに散在せり、狹きも五十人を容るべく廣きは三百人を容るゝに足る。余は後日の話の種と車夫を待たせ置き、と或る共同溫泉場へと飛込めり。共同溫泉内の光景は實に貴賤平等無差別裸體人種の無禮講なるのみならず、亦た宛然たる諸國諸人の展覽會場なり。共同溫泉として東京其他の錢湯と事變り、恰も劇場の土間の如く一

別府町全景

區一劃に仕切りたれば優に一人一浴安臥の姿にて手足を充分に伸展し得ること自由自在にして、而かも他人の皮膚肢體に觸るゝが如き不快更になし。余の浴せし浴槽は泉底珠の如き白砂より成り、水深約一尺有餘平臥すれば全身を沒するに足る。況んや泉質清ふして水晶の如く眸を決すれば泉底の砂土歴々目視し得べし、此所に端なく無我無心の境界に入り、手足を動かし、タブ〳〵亀の子を學ぶ心地は功名利祿も何のその、英雄も豪傑も此に到つて三尺の童子と異ならず、其愉快サ加減何に譬え樣もなし。

別府温泉の湯瀧

實にや温泉療法の神髓は其理化學的及温度的作用を外にして塵事一切を放擲する心身の絶對的保養にあるなるべし。人は曆日なきの境遇に入つて病魔侵襲の餘地あるを許さず。世の醫家諸君が或種の神經性疾患其他に對して温泉療法を此の意味に利用せられんことを嘱望して止まず。

共同温泉を出で更に車を飛して海岸に至り、所謂別府獨特天下逸品の砂浴なるものを見る。こゝにも自體試驗の要を認め、更衣所に就き衣帶を脫して砂浴場へと導かれぬ。砂浴場は海岸一帶の

地域にして、潮滿つれば海波來て渚を洗ふ所、干潮の際砂地を掘れば温泉到る處に涌出す、蓋し一場の奇觀なり、海岸一定の地帶に天幕を張りて浴場に充つ、浴牀は砂地を身體形に掘りしものにして、其所に仰臥すれば「砂かけ」と稱する女ありて褥がけにて温砂を身體全表に被覆し吳るゝなり、砂を牀とし砂を衾とし砂を枕として臥すれば、體膚に佳なる温度を有する泉質はジクリ〳〵と滲出して温罨法、壓抵法、温蒸法の作用をなし須臾にして發汗淋漓たるを覺ふ。而かも枕頭咫尺の地は渺茫たる青海原にして海風面を掠めて涼を送りて來る、爽快なんぞ云ふばかりなし。

別府海岸の砂浴

十里江山曲々斜。海波到處洗温沙。砂湯砂浴眞奇絶。地上生人人似花。

幾道靈泉涌海中。干潮來浴見奇功。沙茵木枕夢安穩。臥見青螺可憐二八破瓜姬。

雪骨氷肌臥砂林。

温氣沁身夢正熟。

容姿彷彿睡菅鶯。

（蓬城）

是築豐。原詩載在卷末。次長町象東翁韵。

海風掠面夏如春。仰臥夢安砂作茵。靈浴有功身漸健。笑聲自漏抱痾人。同上

砂浴場を出で濱脇を經別府市内の車上見物を追行す、偶〻一書店に就て『布岳懐舊詩史』なるものを求む。布岳翁儒を講じ佛を講じ、僧と爲り俗と爲り、四方を遊歴し、餘業文墨詩畫に長じ田能村竹田、帆足杏雨等と其書名高し、此書門弟の編纂せしもの、卷頭に掲げし畫本見る可きもの少からず、内に菡西雜咏の一詩あり曰く。『柴津西去菡江邊。硫氣團々白似煙。好向此中來養老。青山到處有温泉』今昔二情なし。他年一日事情と境遇の許すあらんか。斯る地域に老を養ひ餘生を送りたきは何人と雖も一致する理想なるべし。公園其他を見物し黄昏過ぐる頃旅館に歸り、例に仍て又浴を取る、是れ温泉場の行事なんめり。此夜繪葉書抔を認め知友の下に送り、眠に就きしは午後十一時。

六月十三日（木曜日）朝起澡浴後寫眞師を呼び寄せ樓の欄角に憑りて撮影す、後日の記念とせんが爲めなり。此日天晴る蒼空拭ふが如し、出遊の意勃々たり、則ち車を呼むで觀海寺温泉行を試む。途次別府物産陳列所を一覽し、去て八幡地獄に向ふ。此間緑樹鬱蒼今を盛りと咲き競ふ山躑躅處々に點綴し、人は倪黄書裏に在りて行くの感あり、こゝら當り丘陵と云はず田圃と云はず、硫煙到る處に起り、隨處に温泉の涌出するを見る。八幡地獄は半死の噴火口の殘蹟なり。一小茶店あり慾深そうな店主繪葉書及温泉染め、絞りの反物等を賣る。交通の便なる處なるに價の不廉なること無類飛切にして、旅客の財布の底をも絞り取らんづ勢なり。後に遊ばんもの、努め此地にて物買ふ可からず。市中にて買へば二三割方安し。此地附近に車を預け置き車夫を案内者とし、間道を歩し觀海寺温泉に向ふ。此温泉は鶴見山の支脈壯麗の深翠を背にし別府

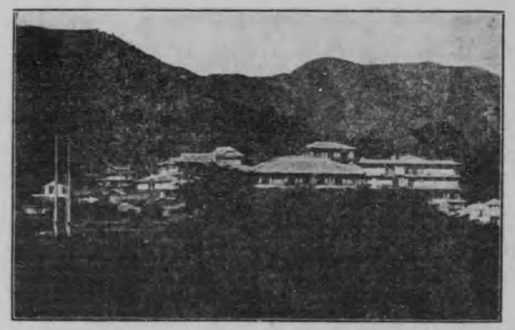
諸温泉中最高の地に在り眺望最も佳なりと稱せらる。旅館坂本屋に投じ小休後一浴を試む。余の案内されし一樓は新築當時後藤捷霞男の投宿せし室なりとて其揮毫に係る觀海樓と題する篆額あり。蓋し此温泉場より別府灣を一望の下に伏瞰し得るもの獨り此樓あるのみ。

煙波千里望悠々。浴後兎遍觀海樓。一抹淡雲看欲盡。永連天處一帆浮。

午餐後前程を經て旅寓に歸る。客中客となる亦風流。樓婢厨丁漸く慣れて家に居るが如し。此夜街頭を散策し別府藩の銀札、古分銅の類を得たり。

六月十四日（金曜日）朝起澡浴例に倣ふ。別府の地頗る氣にいり、田の湯館の居心地も悪るからず、一兩日の豫定延びて四日間に及ぶ。

今日は有名の瀬戸内海の遊覽船とも云ふ可き紅丸（くれなゐ）の出帆當日なるを幸ひ、五日目毎の陸東の途に就かんとし朝來旅裝を理す。豐山豐水流石に名殘の惜まれて何となく後髮引かるゝ心地するぞ人情の常にして、亦是れ奇しき因緣なれ。



觀海寺温泉

遊別府温泉。記滞在中所見。

別府淹留僅四日。偏喜風土適體。豐山如迎豐水媚。況又靈泉到處敷。地僻猶存純朴風。不染都門新流俗。三千浴客夢自安。布衾木枕爭留足。交通之便冠宇内。海浮火船陸汽車。地適農桑饒水産。唆有菜蔬食有魚。娯樂機關陌接陌。公園劇場又寄席。浴餘何邊好曳筇。海岸食市人絡繹。繁昌此處自成籬。人云鎭西小浪華。舷燈明滅和詳船。肉絲聲湯蘇小家。君不見豐後十五湯。別府眞個別成府。吾今遊絃恍忘歸。人間亦有此好樂土。

高田杏湖の九州醫見記中別府の項に曰く。

別府にては、公園より、佐賀關に快渓久原房之助氏によりて建てられたる高さ五百六十七呎、基礎の直徑四十二呎の世界一の高煙突を望見して快哉を叫びし以外に記すべき何物なも有せず、名高き温泉は必しも靈泉にあらず。所詮世には噂の方が遙に見事なるもの少からず。

大分にては同市唯一の小兒科專門醫立川氏を訪へり。余は友の爲に患者踵を次で到る隆昌を祝福し、且平安なる鄕里の開業を慶賀するも、余自身に於ては、平安なる生涯を望まず、願はくは日蓮の如き生涯を求めん哉。既往三十餘年逆境に處し來りし余が、翻然、鄕黨の秣にすがりて平安なる生涯を求むる日よ、そは余の精神的に死亡せるなり。

大分の港は莒薗と書きて「カンタン」と訓じ、又春日浦或は神宮寺浦といふ。天文年中大友宗麟が葡萄牙船と互市せる遺跡にして今は瀬戸内海航路の西端となれり。余茲より、内海の覇者紅丸に乘じて大阪に歸航せんと豫定せしも、海荒るゝこと連日にして出帆遲れしが故に、再び汽車によりて逆行す。大分灣頭上弦の月春霞に淡し。（大正六年四月一日稿）

昔者、萩生徂徠は豆を嚙むで古今の英雄を罵る。今や杏湖は椽大の筆を振つて天下の醫人を罵り時事を罵りて猶ほ飽き足らず、筆鋒更に進むで宇内の風景に及び、馬溪を罵り別府温泉を罵る。余は風景觀に於て杏湖と絶對的反對の見地に立てるも亦一奇一興ならずとせんや。

午後三時發の紅丸にて別府港を出帆す。管店樓婢樓丁等余の船室まで見送り吳れしは嬉れしかりし、他鄕却て是れ家鄕を去るの感ありにき。紅丸は大阪商船の特に此航路の急行に充てたるものにて昔樂隊を備へ附け喇嘛たる聲に送られて拔錨せしは何よりの景物にして勇ましなんぞ云ふばかりなし。船室内にて高松の舊知大野氏父子に偶然面會せしは奇遇。船豐後海峽を過ぐる頃より船内にて餘興開催、義太夫、浪花節、端唄等の技交々演ぜられ、濤聲絃聲に和するの奇趣を味ひつゝ鏡面の如き瀨戸内海の航路をつづけ八時間にして伊豫高濱に著し、十五時間にして高松に著す。

燈洋東去詫間灣。身過鹽飽七島間。玉藻城樓臼於鳥。依稀微認故鄕山。

六月十五日（土曜日）高松に歸鄕せし第一要件は亡き兩親の展墓ミ氏神への參詣なり、近親の者に伴はれ久振にて栗林公園を散歩し茲にて記念の撮影をなし、導かるゝ儘に屋島に上り、歸路、舊友鈴木成蹊君を訪ひ久濶を敍し二時間餘にて辭し去り、此夜はなつかしき叔母の家に睡る。

六月十六日（日曜日）早朝近親に見送られ連絡船にて再び岡山に渡り時間待合の都合上後樂園に一遊、夜行汽車に投じ翌十七日午後海陸無異横濱の蝸廬に歸著、膝を繞るの兒等お土産の請求太だ急なるも亦家庭の一愉快。（終）

我鄕の先輩象東長町醫學士予ミ相前後して別府温泉に遊び。別府温泉雜詩若干あり、茲に其高什二三を附載して予の別府觀の必ずしも溢美の言にあらざる左券ミなす。

別府温泉餘事　　象東　長町耕萍　　藻城識

蒸熱氣氣常蓄春。黑沙被體又爲茵。須臾發汗淋漓裏。療得沈痾幾許人。（砂浴）

67
375

吾有沈痾在腹中。久求治方亦無功。此來澡浴經旬後。已覺體膚隨日豐。（砂浴）

群峯駢立與雲親。山麓透迤自作津。地底溫泉長不盡。百痾療得幾多人。（別府所見）

大正八年一月一日印刷
大正八年一月五日發行
〔非賣品〕
著者發行者　横濱市花咲町五丁目六十八番地　長尾折三
印刷者　東京市本郷區駒込林町百七十二番地　櫻井新三郎
印刷所　東京市本郷區駒込林町百七十二番地　合資會社杏林舍

終